

看護学は実践の科学ですから、看護学として教室で学んだことを、実際に看護が行われている場に出向き、自分自身の目で確認、あるいは、実際に行い、知識と現象を結びつけることをしなければなりません。看護師となるために実践の場に出向くということは、専門職としての知識・技術・態度を統合し、看護を必要とする人々に行為をするということにはなりません。

特に、技術を用いた行為には、知識を基盤にした判断力や安全・正確・安楽に技術を使える力、倫理的態度やコミュニケーション能力などが求められます。したがって、学内での演習であっても臨場感をもって真剣に行い、また、実習に臨んでは技術の練習を繰り返し、実習中も予習と復習を行うことが不可欠です。実際とモデルとはまったく違う感触かもしれませんが、練習を重ねることによって、無駄のない、スムーズな動作を身につけることができます。このような真摯で誠実な事前学習があってこそ、実習は許されると思います。学生と教師は協力し、より最善の状態で実習に臨むことが必要です。

母性看護においては、妊娠、出産、産褥、新生児期に看護師として習得しておかなければならない技術があります。本書は、母性看護に必要な技術について、写真やイラストを通してより具体的に学習できるように工夫しました。各技術については、基本的に、技術を実施する目的・準備・実施方法・実施後の評価のポイントを示しています。また、技術の根拠となるような知識、あるいは、技術を使う上でのコツなどは、「プラスα」や「留意点」で付記されています。ナーシング・グラフィカ『母性看護実践の基本』と合わせ、学内での演習や実習で活用していただきたいと思います。

本書で示している看護技術は、これが唯一正しく、必ずそうしなければならないというものではありません。「なぜ、そうするのか」ということが理解できれば、方法を丸暗記することなく、妊産婦や新生児のニーズや状況に合わせて修正し、個別的に技術を使うことができます。本書は、このように使っていただくことをねらいとしています。

本書を通して、また、本書を活用していただく教師の皆様方の熱意を通して、学生の皆様が母性看護学実習により一層の関心をもってくださることができれば、編集者としてこの上ない喜びです。

横尾京子

はじめに

---